

語り部 KOBE1995 十周年誌

語り部 KOBE1995 のあゆみ

～現在・過去・未来～



- もくじ -

10年目のことば 1-28

活動の写真 29-33

活動の年表 34



語り部KOBÉ1995は、阪神・淡路大震災から10年目の2005年に結成され、以来、大震災の体験を語り続けてきました。

今回、震災から20年、団体の結成から10年を前に、関係者が思いを十周年誌に綴りました。

2014年 12月

20年後のことば。

10年目のことば。

10-20 語り部
K O B E
1 9 9 5

「ありがとう」 田村勝太郎

<ありがとう>

崩れ落ちた家の前で、裸足・パジャマ姿で立ち尽くした瓦礫の下にいる母に「だいじょうぶか」と声をかけていた私。

近所の若者の力で瓦礫から引き出された母の手を引いて、芦屋市精道小学校の避難所へ。教室で握って振る舞ってくださった「にぎりめし」。ふと気が付くとジャージ上下を身につけている。「どこかで・だれかに」頂いたのだろう。

ありがとうから始まる体験談。

<家無きおっさん先生>

当時1年担任。職員室の床を寝床に50日。

神戸市の勤務小学校（避難所）へ。ボロボロのママチャリで5時間、東灘区・三宮近辺のつぶれてしまった街並みの中を歩いて兵庫区の勤務校に到着。

「田村、今ここは避難所になっている。どうなっているか見ておいて。」仲間の一言で口内を巡る。

児童数200人足らずのところに800人の避難者。教室、体育館は人人人。

喫茶店を始める（黙りこくっているたくさんのシルバーを見て、折角ここまで生き延びて来たのに、病気で命を落としたらもったいない、との思いから）。

5年生の児童（校内に避難していた）8人と喫茶開業、20日余り。

<支えあった避難者たち>

マッサージのボランティアをしたFさん。

暖かい汁物を毎日提供した、避難者おばさんたち。

間仕切りの段ボール板にかわいい絵を描いてサービスした6年女子。

——あたたかかった避難所——

<本気の防災を>

阪神淡路の体験から見えてくるもの。

専門家ではありませんが、自分たちの地域・足元をしっかりと見つめて、熱心から本気へと地域みんなが活気のある活動を考えるお手伝いを。



「語り部KOB E 1995の活動に参加して」 庄野ゆき子

語り部KOB E 1995の活動に参加して、10年が経ちました。

私はクラッシュ症候群を乗り越えて、たくさんの支えを受け息子の分まで生きています。命さえあればなんとかなる、助けていただいた方々に感謝しています。

病院では生と死が隣り合っていました。

私自身も、死んでいてもちっとも不思議ではない状況だったと思います。

入院した病院では、お医者さんやほかの患者さんに助けてもらいながら、生き抜く事が出来たのです。

カブけてくれた方には、ガンの手術をして快方に向かって行く方も居ました。

形が違ったとしても、一度死を覚悟して助けられた命ということで思いは同じだったのかもしれません。

切断を覚悟した右足も、先生がたのリハビリのおかげで、歩けるまでに回復。

命さえあればなんとかなるものです。逆に命を落としてしまっは、何もできません。

だから、自分の命も人の命も大切にしてほしいと思います。

地震や事故というものはいつ起こるのか分からないので、今日のことは今日でがんばり、毎日を生きなければなりません。

そうしておけば、こうしておけばと後悔する事ありません。

不運にもわたしより先にいってしまった息子は今でも帰ってくるように思います。

私は、息子の遺体をこの目で見ていません。

だから実感がなく、息子はどこかにいっているだけなのだ、またいつか「ただいま」といって帰ってくるのだと、心のどこかで思っています。

避難道具を用意しておくことも、気持ちのゆとりにつながります。

年とともに体調が悪くなり、いつまで動けるか分かりませんが、がんばってなんとか活動していきたいと思います。



「20年を迎えて」 浅井鈴子

<20年を迎えて>

会に偶然の出会いで参加して、20年も語りを只一主婦が続けてられたのは、会の皆様のお陰だと感謝しています。誰かが語って居なければ忘れられてしまうのかも使命感にも似た、複雑な思いと、語るたびに傷つく心に悩んだり苦しく思ったりの20年でした。

<会在籍中に何をやったか>

依頼のあった学校に行き「自分の体験した地震の状態」「今を生きる大切さ」「命の大切さ」を語っています。

<エピソード>

会を続けていたお陰で、娘の友人に会い今も交流が来ています。訪問した小学校で、最後の学年の級友に出会い、遊びで学校ごっこをしていた時のノートのコピーを手にする事が出来ました。

又在校した小学校より、その当時使用していたハサミが、20年の時を経たにもかかわらず錆び付く事も無く、当時の姿で私の所に帰ってきました。色々な思いを抱きながらも、語り部を続けていた私に、娘からのご褒美なのかとうれしく思いました。

<会で関わった方へ>

時々語る事に悩んで歩みを止めようとする私を、励まし、勇気を与えていただき、有難うございます。人生の行く道を教えて頂き、人生の先輩に感謝しています。

過ぎ行く年月と共に、語る事の難しさ。このまま語って行けるのかと言う不安と疑問。でも誰かが伝えなくては、思いを行き来しながら、これからも会に参加して行きます。



「語り部と私」 崔敏夫

<大事な息子>

息子を私のひと言で亡くした事は悔やんでも悔やんでも悔やみきれません。

家の下敷きになった息子を助け出しやっと探す事ができたが、亡くなった息子の顔を見て涙が止めなく流れ落ち涙が止まらなかった。涙があんなに出るものかと思った。

前日、息子と銭湯で背中を流し合い、いろんな話しあった事が嘘のようだった。

息子を泣くし全財産を失ったゼロからの出発でなく、マイナスの出発だった。

つらかった！！

焼け野原になった暗闇の世界から光りを取り戻し、住んでる町を明るく安心な住みよい町づくりを目指し自治会を再結成する。

<出会い>

語り部の出会い、田村との出会いです。

小学校同級生で野球少年で仲の良い友達だった。

卒業後1、2回、偶然会った事はあったが、その後30年ぐらい会わなかった。

ニュースステーションで息子を亡くした私を見て、田村は驚き花を持って尋ねて来た！！その時の嬉しさは忘れない。

語り部を通じてより一層絆が深まった。

<防災と共に>

防災活動に取り組んでいます。

防災活動が、私の語り部の原点です。

語ることで地域防災の活力になれば・・・。

語り部を通じて防災意識が高まれば・・・。

語り部の新しい取り組みです。

語ることから学び、語ることから人と人とのつながりが出来、その絆を大事にし、広がる輪を大切にしたいです。

私の大切な言葉——

命、愛、絆です。

三つの言葉を目標として、語り続けたいです。



「語り部KOBÉ1995で、これから伝えていきたいこと」 長谷川元気

私は、私がまだ小学校2年生だったときに、阪神・淡路大震災で、母と、当時1歳だった弟の翔人を亡くしました。私が震災にあって、どんなことを感じて、どんなことを学び、そして今、どんなことを思いながら生きているかということ、伝えていきたいです。

私は、震災があったとき、古い木造2階建てのアパートの、1階の部屋に住んでいました。そのアパートに、父と母と、上の弟の陽平と、当時1歳だった弟の翔人と私の、家族5人で住んでいました。そして、震災が起きて、アパートの2階部分が1階に落ちてきて、1階の部屋は、2階に押しつぶされました。父と、陽平と私は、押しつぶされた家の隙間にいて、奇跡的に助かりましたが、母と、翔人は、死んでしまいました。

つぶされた家からなんとか抜け出したあと、私と陽平は、とりあえず近くの公園に避難しました。父は、母と翔人を助けるために、つぶされた家に残りました。長い時間がたって、日が暮れ始めたころ、父が公園にやってきました。そして、目に涙を浮かべながら「助けようとしたけど、あかんかったわ…」と言いました。それをきいて、私と陽平は公園のベンチに座り、声を上げながら泣き続けました。そして、なかなか泣き止まない私と陽平をみて、父は、二人の肩を抱き寄せてこう言いました。「…もう、家族三人しかおらんようになってしまったから、これからは、家族三人で力を合わせてがんばっていこな。」それから、その言葉を心に刻んで、家族三人、お互いに気遣いあい、支え合いながら、生きてきました。

その震災のあった当時、夜眠りについてから、目が覚めるまでに、何度も、同じ夢を見ました。その夢の中では、家族5人で仲良く暮らしていました。母と翔人と一緒に話をしながらご飯を食べているところや、翔人と、公園でサッカーをして遊んだりしている場面が出てきました。翔人は、まだ1歳半なのに、私がサッカーボールを転がすと、勢いよく蹴り返してきました。「すごいなあ！将来が楽しみやなあ」と母と一緒に話したりしていました。その夢をみている間は、「なんや、震災なんかなかったんや。お母さんも翔人も、みんなおるし、きっとあの震災こそが夢やったんや」と思っていました。でも、目が覚めると、「ああ、やっぱり震災はあったんや…こっちが現実なんや…」と受け入れきれない現実と直面して、気がつくくと、涙があふれていました。そんなことが、小学校の間、ずっと続きました。

そのような、経験をして、私が学んだことは、大きく分けて2つあります。

一つは、夢をもつことの大切さです。私が小学校2年生だった当時、学校でも授業中や休み時間に、ふとしたことで、母のことや翔人のことを思い出して、泣いてしまうことがよくありました。そんなとき、すぐに私が泣いているのを見つけて「つらかったなあ。でも、大丈夫。元気くんなら、きっとがんばれるはずやから」と言って励ましてくれたのが、当時の担任の先生でした。私は「この人のような、子どもの目線に立って励ましてくれる、思いやりのある、温かい先生になりたい」と思いました。そして今、先生として子どもたちに接しています。自分の身に起こった出来事や、人との出会いを大切に、その経験から夢をもって、その夢を実現するためにつき進んでいく。そうした結果が、今の私の姿なのだと思います。

そして、もう一つは、今、周りにいる人の、大切さです。私は、母と翔人が死んでしまったと知ったとき、とても後悔しました。「どうして、もっと母に優しく接することができなかったんだろう。どうして、もっと翔人と一緒に遊んであげられなかったんだろう。どうして、もっと、母と翔人に感謝の気持ちを伝えてこなかったんだろう。」

その時、私は初めて知りました。今、自分の周りに当たり前のようにいてくれている大切な人は、いて当たり前じゃない。一瞬にして、失ってしまうこともあるんだ、ということ。

私の話を聞いてくださる方々には、私のように悔しい思いはしてほしくない。だから、自分の周りにいる、大切な人に些細なことでもいいから普段から感謝の気持ちを伝えてほしい。

「いつも、ありがとう」という気持ちを伝えてほしい。

今、自分の周りにいてくれる人の大切さ。それが、震災で私が学ぶことができた、一番大事なことだと思っています。それを、伝えていくことが、震災で生かされた、私に与えられた使命だと思っています。

「変わるもの／変わらないもの」 矢守克也（顧問：京都大学防災研究所教授）

1月17日の地震からまもなく20年。「語り部KOBE1995」の活動のお手伝いを始めて10年が経過します。一部のメンバーの方とは、もう15年近くのお付き合いになります。平板な感想ですが、長かったような短かったような。時間感覚はいつも不思議なアンビバレンス（両義性）をもっています。

お付き合いが長くなるにつれて強くなってきた思いとして、同じ方の語りでもお話をうかがうたびに、新しい発見や気づきがあるという点があります。その理由は、いくつかあると思われます。まず、お恥ずかしい可能性として、お話を聞いている私が単に忘れていたという疑いがあります。ただ、言い訳するわけではないですが、たとえば、35歳だった私にはしっかり受けとることができずいつのまにか忘れてしまったお話が、50歳の私には強い印象を残した（あるいは、その逆）ということもあるように思えます。その意味でも、本会での活動から、長く活動を共にさせていただくことの大切さを私は学びました。

次に、お話の中身が実際に変わっていくという要素があります。語りの中身は、もちろん、1月17日の出来事を中心にする場合が多いのですが、メンバーのみなさんがそれから20年にわたる人生を生きてこられているという事実をしっかり受けとめることが、とても大切だと思います。その間には、ご家族が亡くなったり、逆に新しいご家族が誕生したり、お孫さんが入学したりなど、多くの出来事がおきます。1月17日は、そのすべてに光や陰を投げかけています。

さらに、東日本大震災など大きな社会的な出来事も、その後の語り部さんの活動やお話の内容にも少なからず影響を与えてきました。たとえば、東日本大震災の被災地の子どもたちを神戸に迎えたり、メンバーで被災地を訪ねたりといった活動です。さらに、メンバーの地元での防災活動の取り組みなど、新しいタイプの活動も増えてきました。

しかし、こうして「変わるもの」の中に、けっして「変わらないもの」があることも、変わることに以上大切に感じています。「今年、娘は二十歳になった」、「今ごろは本人の望み通り、教員になっているだろうなあ」、「親戚の子が亡くなった子と同じ年齢になった」---こういった言葉をメンバーから聞かされたときに、ハッとさせられました。みなさんが亡くなったご家族とずっと一緒に生きておられること、このことは「変わらない」と思います。

考えてみますと、グループ発足10年にせよ、あの地震から20年にせよ、100年周期とか1000年に一度とかがごくふつうの自然（地震）のカレンダーと引き比べるとほんの短い時間です。それに、人間も、二十歳と言えばまだまだこれからです。幸い、「語り部KOBE1995」には、今年、新しく若いメンバーが加わりました。みなさんのお手伝いをしながら、これからもずっと活動を続けていきたいと願っています。



「ゼミと語り部KOBÉ1995の交流」 船木伸江（顧問：神戸学院大学准教授）

語り部KOBÉ1995の皆さんがはじめてゼミに来ていただいたのは、2006年の秋でした。それから9年、語り部として阪神・淡路大震災の経験を学生に伝えるだけでなく、人生のよき先輩として様々なことを学生に、そして私に教えて頂いています。

この度、この冊子をまとめるにあって、学生たち、卒業生たちが書いた言葉一つ一つからゼミと語り部KOBÉ1995の交流の価値を改めて感じました。

ゼミでは、みなさん語り部のお話を聞いて学生たちの目線で自分たちの教材作りを行っています。

卒業生が作った教材を通じて後輩が語り継ぐ。これからも、語り部KOBÉ1995と交流しながら阪神・淡路大震災を伝えていくことができれば嬉しいです。

「語り部KOBÉ1995から知る“神戸”」 杉山高志（本誌編集委員：矢守ゼミ）

私は、語り部KOBÉ1995のみなさんから、「神戸」を学びました。

震災体験から語られる災害の描写は、防災・減災を考えるととても貴重な機会になりました。ただ、それだけではなく語り部メンバーのお話をじっくり伺う事で、震災が起きる前にどんな日常があったのかを知ることも出来ました。災害現象からのみ映し出される神戸だけではなく、多様な文化や時代のレイヤーに織り込まれた「神戸」が存在する事を知るきっかけも、語り部KOBÉ1995は私に与えてくれたのです。

本誌の編集にたずさわること、その思いを改めて強めると同時に、今なお編まれ続ける語り部KOBÉ1995の現在と未来があることも実感できました。多くの方々に支えられた語り部KOBÉ1995の活動が、今後どのような展開をみせるのかとても楽しみです。



「出会いとつながり」 照本忠光（姫路市立飾磨(しかま)中部中学校校長）

私が“語り部KOBÉ1995”の皆さんと出会ったのは、新米教頭として、しかも初めての小学校勤務になった今から10年前にさかのぼります。そのきっかけは、「県立舞子高等学校環境防災学科の第1回卒業生を紹介してほしい」と、諏訪先生（現、県立松陽高等学校）に依頼をしたことによります。彼と私は震災後、県教育委員会が立ち上げたEARTH員だったご縁で“新たな防災教育”を推進するなかで出会った仲です。

かねてより防災を一つの切口として人権に係る教育を展開したいと考えていた私が、管理職としてはじめて赴任したのは姫路市立旭(きょく)陽(よう)小学校でした。上司だった当時の校長も、この思いに共感して下さいました。そして、児童には「生きる力」を育むだけでなく、この教育をとおして、優しく・思いやりを持った大人に成長してほしいと願いました。

やがて、神戸学院大学で防災・社会貢献ユニットが立ち上がり、同大学の船木伸江先生のご尽力があって旭陽小学校との関わりがスタートしました。語り部の皆さんにも大変お世話になりました。「(防災をやるという…)どんな変わった管理職だろう。出会うのを楽しみにしてきた」と、語り部の代表の田村さんが話されたことを今でもよく覚えています。

その後、船木先生が中心となって「小学校の全教科で、防災を取り入れた教材」を作成されました。旭陽小学校も可能な限り協力した画期的なもので、その後の『夢見る防災教育』（晃洋書房）の発刊につながっています。

3年間の旭陽小勤務ののち、校長としての初任校（姫路市立豊富(とよとみ)小学校）でも引き続き、語り部の皆さん並びに船木先生には大変お世話になりました。その頃より「将来、大きくなって〇〇になりたい」と、子ども達に“夢を育む防災教育”へと展開したいと思うようになりました。

ところで、皆さまとの出会いから、様々なつながりや温かさを感じます。旭陽小では、取材に来られていた神戸新聞のT記者は、語り部さんのお話に、涙を隠しながら耳を傾けておられました。また、豊富小では、母となって子育てを頑張っている教え子の一人に出会いました。20年前の大震災で亡くなられた彼女の父は、崩壊する阪神高速を走行していたトラックの運転手さんでした。「校長先生、おじいちゃんはどんな人やったん？」と尋ねに来たお孫さんも今では立派な高校生です。震災を、そして震災をとおして体験したことを風化させることなく、残された教職生活でも「出会いとつながり」を大切にしていきたいと思っております。

今後とも、兵庫発の防災教育の推進のため、どうぞよろしく願いいたします。

「創立10周年に寄せて」 萩野茂樹（津市ボランティア協議会会長）

語り部KOBÉ1995創立10周年おめでとうございます。

田村勝太郎さんとは7年ほど前、日本災害救援ボランティアネットワークの講演が縁で知り合いました。

以来、いろいろな場面でお世話になっています。

先日も、私が実行委員長をしている津市の防災講座「津市民防災大学」で、田村さんと長谷川元気さんにおいでいただき、60名ほどの受講生と市民の前でお話をさせていただきました。

田村さんによれば、「津にはもう10回ほど来ていて、慣れると津駅までの近鉄特急車内での時間が短く感じる」とのお言葉です。

田村さんと私が知り合った事を契機に10回開催された津市での震災体験談は、多くの津市民の防災意識の向上に確実に役立っています。

津市と神戸市は、電車で3時間ほどの距離ですが、阪神淡路大震災の被災の様子については、ほとんどの市民にとっては、ともすればテレビの画面の中での出来事でしかありません。

体験者にしか語れない言葉は、現実起こった出来事であることを思い出させ、自分や家族にも起こりえる災禍であることが強く刻み込まれます。

あの、20年前の阪神淡路大震災の教訓は、ともすれば時間と共に薄れてはいきますが、そうはさせないとの意気込みと共に、目の前に震災の教訓をイキイキと蘇らせていただく活動は、人々の「命にとって大切な事」だと思っています。

今までのご活動に敬意を表する共に、今後のますますのご活躍を期待しております。



「阪神淡路大震災から20年今思えば…」大賀一男（千歳地区自主防災委員会）

当時、私は須磨消防団第二分団の分団長を拝命しており、震災発生時、我が家は半壊程度家族の無事を確認後、寝間着姿のまま、壊れた表戸をこじ開け表に飛び出し、言葉を失った。昨日までの町内風景はなく、倒壊した街並みは瓦礫化、まるで爆撃を受けた様な有様であり、近隣の住民の声もしない。消防団活動服に着替える間もなく、急ぎ革製の半コートを身にまとい、出かける寸前、ガラスの破片で右足親指を裂傷、応急手当用具も散乱した中では捜しきれず、植木に巻いてあったアルミの針金で一時的な止血をし、軍足3足をはき長靴とヘルメットを着装して近隣住民の安否確認に走り回った。

特に被害が甚大であった、常盤町、千歳町は消防署、須磨2小隊と他都市・消防団の応援隊とで懸命な消火活動を展開したが、防火水槽と千歳小学校のプールの水は瞬く間に底をつき、消火活動は鈍化した。最盛期となった火災の勢いは衰える事は、なかった。2日後、白川台に住む娘の家に辿り着き、革製の半コートを脱ぎ、びっくりポケットに5センチ角の消し炭が入っており、革のボアも焦げていた。よくヤケドもせず…。20年経った現在でも、その皮コートを改造し、着用している。記憶を失わない為に…。平成7年3月3日消防庁長官より彰記を拝受、1年後に後輩に道を譲るべく消防団分団長を辞任した。

平成20年度から文科省の補助の下で、地域教育協議会が神戸市に設立され、北区のひよどり台小学校・鶴台中学校校区。須磨区・長田区のだいち小学校・中学校校区の2校区に神戸市第1号として名乗りあげました。

当時、私は保護司、民生児童委員会長をしており、地域教育協議会（現在の学校応援団）の学習ボランティアを担当、小学校には週2日放課後の学習支援指導員として参加をしていました。小学校で「先輩ご無沙汰しています」と声をかけて頂いたのが、語り部神戸の田村氏。田村氏はだいち小学校の「あおぞら学級」の担当をされており、千歳町に住んでいた頃の学生時代の話をして頂き、私の記憶にうっすらと思い起こす事が出来ました。現在では、千歳地区自主防災委員会の行事や講演会について色々アドバイスや助言を頂いております。

千歳地区は震災のため須磨区でも壊滅的な被害を受けた地域であり、震災後低迷していた自治会活動は、まちづくり協議会として、新しいまちづくりに専念。私も神戸国際港都とし建設事業鷹取東第二地区震災復興土地区画整理審議委員として長ったらしい区画整理事業に参画。旧千歳小学校跡地は、防災公園として、色々な設備が組み込まれ、万一の災害時には一時避難所としての機能を発揮できる公園として生まれ変わりました。震災時、当千歳地区での震災犠牲者は、47名そのモニュメントも完成し、毎年1. 17には発生時刻に合わせ、追悼の灯集也会も継続的に行われています。現在は千歳地区6自治会が連合加盟する千歳地区連合自治会が地域住民の安心・安全なまちづくり活動を実施していますが、現在各地区で構成されている〇〇地区防災福祉コミュニティではなく、独自の活動を立ち上げ千歳地区自主防災委員会を設立、各種の防災行事や講演会・研究会を立ち上げ展開中です。

災害に強いまちづくりには、人と人とのネットワークづくりが不可欠の観点から自主防災委員会としては、比較的大規模な防災訓練も今年で3回目を数えます。

いざという時、助け合うには、日頃の住民間の信頼関係があってこそ、をモットーにして崔敏夫委員長が任命されました。震災でご子息をなくされた崔委員長は語り部神戸の活動を通じて、震災・防災・命のリレーの大切さを常に話され、住民間の絆ということに造詣の深い、崔委員長の考えや行動力に感銘を受け、副委員長というより良き番頭として、努力を惜しまない決意で、引き受けました。

自主防災委員会では、千歳地区ある限り、地域住民に語り続ける事。風化させない事の思いを新たにすため、震災モニュメントの整備に取りかかっています。

今後は、震災の経験を教訓として、自治会活動をはじめ、自分の出来る範囲内であらゆる面での、防災活動を展開して行きたいと考えています。

「結成10年、おめでとうございます」 小野寺勝（野田村教育委員会）

『語り部KOBÉ1995』結成10年、おめでとうございます。
語り部神戸1995の皆さんお元気ですか。結成10周年おめでとうございます。

さて、東北大震災から3年半以上が経ちます。野田村では、高台団地整備も進み、今年になってから多くの住宅建築が見られ、明るさが戻りつつあるなと感じております。

あの時、田村さんは、沈んでいる子供たちに今の神戸を見てもらい将来ああなるんだと感じてもらいたいと言っていたことを今また思い出しております。

平成23年8月の神戸招待旅行では、崔さん、浅井さん、矢守先生の会の皆さんから、沢山の思い出を子供たちに与えてもらいました。帰りの子供たちの笑顔がとても印象的でした。

あの経験した子供たちは、今も親御さんや村の大人に元気を与え続けております。そして、あの時の野田小学校の子供たちも早いもので来年は高校生です。大人になっていく表情や態度を誇らしく思いながら観ています。

私は、会の皆さんと一緒に話す機会に恵まれておりますが、これからも、沢山の子供たちに皆様の思いを語り続け、未来を素敵なものにしたいと思います。願う一人です。

皆様の今度のご活躍とご多幸をお祈りし、簡単ではありますがお祝いの言葉といたします。



「10周年メッセージ」 小林友美（野田村立野田小学校 特別支援教育支援員）

『語り部KOBE1995』結成10年、おめでとうございます。
みなさまが「後世のために」「笑顔のために」と力いっぱい過ごされた10年間。
こうしてお祝いさせていただけることをうれしく思います。

「震災を財産に…」

田村先生からいただいたこの言葉は、東日本大震災から今まで、わたしたちのテーマとなっています。

毎年10月、野田小学校では学習発表会が行われます。「SMILE～野田村に広がれ！元気と笑顔～」が今年度のスローガンでした。

あの日から、子どもたちも先生方も「地域のために」「笑顔のために」と行事に取り組むようになりました。

子どもたちの元気が地域へ、地域の笑顔が子どもたちへ、その笑顔が未来へ…。

この当たり前のことが財産であると気づかせてくれたのは、震災ではなく、『語り部KOBE1995』のみなさまです。元気と笑顔の奥にある、苦しみ、悲しみ…。それでも前を向いて生きるみなさまはわたしたちにとっての希望なのです。みなさまにお会いできたことが一番の財産です。本当にありがとうございます。

野田村は、いつでもみなさまを大歓迎いたします！神戸の街と人が大好きです！
みなさまのさらなるご活躍とご多幸を、このご縁がいつまでも続いていくことを祈りつつ…。For our SMILE！！



船木ゼミ学生・卒業生 前田緑（船木ゼミ1期生）

船木ゼミ1期生の前田です。在学中から現在に至るまで、語り部KOB E 1 9 9 5の皆様には大変お世話になっております。卒業してからも、船木先生からお声かけいただいて出前授業や、語り部さんとのクリスマス会など様々な場所でお会いすることができてとてもうれしかったです。

私は5年間務めたJAを辞め、2014年の4月から神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科の実習助手として勤務しております。毎日、18歳の学生たちを見ながら「この子たち若すぎる・・・」と思って過ごしていますが、私が初めて語り部KOB E 1 9 9 5の皆様とお会いしたころは、20歳。あの頃の私もこの子たちのような感じだったのかなと思うことがあります。

初めて本学の有瀬キャンパスの11号館でお会いした時の記事を、矢守先生が授業の資料でお使いになっているのを拝見し、とても鮮明に思い出されました。その後も、姫路市立旭陽小学校への出前授業を毎年一緒に行き、給食をほおぼる私を見て暖かく笑って受け止めてくれる語り部さんが私の大学生活で大きな存在であったのだと、卒業式を迎えた時に思いました。高校でも防災を学んでいたこともあり、様々な場所で語り部の方のお話を聞くことはありましたが、こんなにも密に接していただき一緒に活動をさせていただけたことは初めてでした。その縁が今でも後輩たちにつながっていることが、卒業した私にとってうれしく思っています。

社会防災学科の学生たちに7月頃に田村さんが防災入門の授業へ来てくださりました。そのあとに、「こんなにも心に残る話を聞いたことは初めてです。もっと聞きたい、もっと教えて貰いたいと思いました。」と一人の学生が話をしてくれました。懲りずにこれからも神戸学院大学の学生とつながっていただけると幸いです。語り続けてくださる皆様と共に、私も歩んでいきたいと思っております。これからもよろしくお願いいたします。



船木ゼミ学生・卒業生 高寄浩至（船木ゼミ1期生）

学生時代、僕は防災教育という自分でも想像すらしていなかった分野に携わっていました。防災教育とは、そもそも防災とは何なのか、ユニット生になった頃は雑把で曖昧なイメージしか持っておらず、当初は学生生活が今より少し充実すればいいかな程度にしか考えていませんでした。

語り部の皆さんと出会ったのは僕がまだ防災について学び始めたばかりの頃でした。

早く当時の話を聞きたいと思っていた僕でしたが、語り部の皆さんはまず始めに被災時の記憶を口に出して語ることは今でもとても辛いことであると仰りました。震災から10年以上経っていた当時でさえ苦しうに言葉にされていた姿に私は衝撃を受けたことを今でも覚えています。

被災した阪神間の街は10年もすれば姿は変わっても当時の爪あとを感じさせないほどに復興したけれど、人の心はおそらく一生元通りにはならないのだろう、被災するってこういうことなのかと考えると、このように辛い思いをする人を今後少しでも減らすと同時にこの記憶を後世に繋ぐ必要性を強く感じ、本格的に防災教育に力を入れるきっかけになりました。その後はたくさんの方の力を借り、また時には叱咤激励を受けながら暇を見つけては夜遅くまで防災教育の教材作りに打ち込み、拙いながらも何とか形にすることができました。

早いもので教材を作り始めた頃から7年が過ぎました。

当時の僕たちの活動で世間の何かが変わったとはとても言えませんが、予想される大災害に対しメディアでは防災や減災という言葉をよく見かけるようになりました。その度に僕は20年前とは比較にならないくらい多くの人々が防災に興味を持ってきているんだなと実感できるようになり、当時の僕たちの活動もその一端を担っていたかもしれないなと少しうれしく思っています。

P.S. 卒業祝いのパステースありがとうございました。今の職場へは自転車通勤のため使用しておりませんが今でも大切にしまっています。

船木ゼミ学生・卒業生 山本真巨（船木ゼミ1期生）

語り部さんと交流…と聞くと、講師と学生という形で関わるが多かったですが、一緒に教材を作ったり、講師としても活動するのは新鮮でした。

いつも聞く側にまわるので、隔たりみたいなものがあつたのですが、語り部K O B E 1 9 9 5の方とは一緒に活動する仲間のような気分でした。今は社会人になって関わることも少なくなりましたが、今後とも「語り部K O B E 1 9 9 5」の発展を願っています！



船木ゼミ学生・卒業生 岸本くるみ（船木ゼミ1期生）

私が小学生の頃、授業で取り上げられ、印象的だったある震災の話。

それは語り部KOBÉ1995のメンバーさんの体験でした。語り部の皆さんとの交流を通して、改めて、目の前に阪神・淡路大震災が現れた気がします。それは、あのときの体験や被害だけを指すのではありません。震災を体験したまちで、皆さんと同じ時を生きているという、感覚に触れたように思います。

教材の作成や一緒に活動したことも成果ですが、それ以上に、あたたかい繋がりに感謝しています。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

船木ゼミ学生・卒業生 小林史弥（船木ゼミ1期生）

震災から、20年が経とうとしています。

当時私は、小学生でしたが、被害なく生活していましたのでテレビしか知りませんでした。大学生時代、語り部さんとの交流を通して、生々しいお話を聞き、他人事ではないと感じました。

最近でも、東日本大震災をはじめ、広島土砂災害等地震だけではなく、いろんな災害が各地で起こっており、非日常的だと思っていたことが日常化しているように感じます。経験者が伝え、また、それを聞いた人が継続的かつ具体的に行動していかないといけないと思います。社会人になって5年ですが、いろいろ考えるところもあります。もう一度思い出し、自分ができる事をやろうと思います。"



船木ゼミ学生・卒業生 岡晃徳（船木ゼミ1期生）

神戸学院大防災社会貢献ユニットに所属して、他の学生とは違う様々な経験をする事ができました。中でも小学校に防災教育の出前授業に行ったことです。

私が小学生2年生の時に阪神淡路大震災が発生しました。その時私は大阪に住んでおり、朝、テレビでヘリテレの映像を見て、阪神高速のピルツ橋が横倒しになっているのを見た時、驚愕したことを今でも覚えています。小学生からユニットに所属するまでの間、防災ということに対して考えたことは無かったけれど、ユニットは私に新たな意識、経験を与えてくれるターニングポイントとなりました。

先ほど述べたように、小学校へのお出前授業は私が小学生の時に考えたこともないような、防災意識を学生側が小学生に防災に考えてもらう手助けをする。まさか自分が教える側に立つことなど考えたこともありませんでした。私が防災教育に関わりが持てたということは今の私にとって財産となっています。

また、語り部さんの方々との交流は実体験を生で拝聴し、当時の体験された状況がどのようなものであったか、また、その中から国、行政が今後取り組むべき課題のみならず、市民、一企業が防災対策に対する意識を変えていくことが災害を完全に防ぐことは難しいかも知れないが、減災という少しでも被害を軽減できるということを考えさせてくれるきっかけとなりました。

語り部さんの方々の体験、知識は机上のものとは一画を置き阪神淡路大震災を風化させることのないように今後も御尽力して頂きたいと思っています。



船木ゼミ学生・卒業生 大橋一徳（船木ゼミ4期生）

私は大学3回生の時に語り部さん達にお会いしました。
語り部さんと交流をしていく中で、私の中で強く感じたことが2つあります。

1つ目は、世間では震災という言葉が1つの言葉として一括りになっているが、震災を経験した人たちには、皆それぞれ、その人だけの物語があるということです。

当たり前のことかもしれませんが、震災という言葉を風化させない為には、震災を経験した人の体験を、震災を知らない子供たちに詳しく伝えて行かなければなりません。

風化させない為には、何をしなければいけないだろうか…

そこで私たち船木ゼミ4期生は、語り部さんたちの経験を後世に伝える教材作りをやらせて頂きました。

2つ目は、人との繋がりです。私は、語り部さんと関わることで、人との繋がり大切さを学びました。私は、語り部の浅井さんの教材作りを担当させて頂きました。

浅井さんは、色々な人の協力や偶然と思えることが重なり、亜希子さんの時計を作ることができたという話をしてくれました。

亜希子さんの時計を作るとは、浅井さんが行動したからですが、その時計ができるまでの過程の中に、人との繋がりがあったからこそ実現できたという話を聞いて、その言葉が印象に残っています。

私は社会人になって、震災に対して向き合う機会は減ってしまいました。しかし、現在でも私にとって、語り部さん達と岩手に行ったことや研究室で色々なお話を聞かせて頂いたことは、本当に貴重な時間です。ありがとうございました。そして、これからも宜しくお願い致します。



船木ゼミ学生・卒業生 小池真名美（船木ゼミ4期生）

代表の田村さんは、小学校時代の担任の先生でした。ご縁があったのか、大学生になってもお話を聞くことができ、とても嬉しく思っております。小学生の頃は、「震災当時に先生の周りで起こった出来事」という事実しか受け取ることができなかったのですが、大学生になってもう一度聞いてみると、その時に関わった人々の想いがたくさん伝わって来ました。

メンバーの浅井さんには、卒業研究を製作する際にとってもお世話になりました。西灘小学校にある震災モニュメントである亜希子さんの時計を通じて、「娘が生きていたことを伝えたい」という、母親としての浅井さんのお気持ちを強く感じました。阪神電車に乗り、西灘小学校の前を通過する時は、今でも必ず亜希子さんの時計を目で追ってしまいます。

語り部KOBE1995の方々に出会い、阪神淡路大震災、そして命とは何かを見つめ直す機会になりました。学生時代に聞いたお話、感じた想いをずっと忘れられず、今年からまた震災に向き合おうと動いています。きっとまたどこかでお話を伺う機会があると思いますので、よろしくお願い申し上げます。



船木ゼミ学生・卒業生 窪直樹（船木ゼミ4期生）

語り部さんのみなさんお久しぶりです。お元気ですか。本当にお世話になりました。

私は、大学を卒業して夢であった消防士として働くことができています。私は、消防士として働きだしてから改めて、語り部さんの話を聞いて、震災にあった人たちの心の声を聞いて良かったなと思っています。私は、今救助隊として現場の最前線で要救助者を助ける仕事についています。助けを求めている人を助けるということは、私が想像していたことよりすごく過酷なものでした。

普段、逃げなければ行けない所に私たちは入って行かなければなりません。正直、怖さや不安でいっぱいの時もあります。でも、語り部さんの話を聞いている私は、震災にあった人たちの本当苦しさを知っています。全ての気持ちがわかるとは言いませんが、他の消防士の方より少しは被災者の気持ちが分かっていると思います。分かっているからこそ、私は勇気を持って助けに行くことができますし、要救助者の気持ちを理解した助け方をすることができています。

今、私が要救助者になっている助け方は語り部さんが教えてくれた助け方です。語り部さんの話を聞いて被災者の気持ちを知ったからこそ消防士として自信を働けています。

これからも被災者の気持ちがわかる消防士であり続けます。
本当にありがとうございました！



船木ゼミ学生・卒業生 臼井達也（船木ゼミ4期生）

私が語り部KOBÉ1995のみなさんと交流させて頂いたのは大学生の時です。

出会ってからもう7年が経ちます。何度も阪神淡路大震災の話聞かせて頂き、阪神淡路大震災を次世代の子どもたちに伝える教材をつくることができました。私自身あまり記憶のない阪神淡路大震災のお話を聞き、震災での被害、地震の恐ろしさを改めて教わりました。東日本大震災での被災地にもみなさまと一緒に訪問し、貴重な経験をさせて頂きました。野田村での思い出は一生忘れない思い出となりました。一緒に訪問させて頂くことで多くの東日本大震災での被災者の方とも関わることができたと思います。実際に被災された語り部KOBÉ1995のみなさまと関わることができたのも何かの縁だと思っています。

私自身このように語り部KOBÉ1995の方々の交流できたからこそ、現在消防士として働いているのだと感じます。みなさまとの交流を重ねるにつれて消防士になりたいという気持ちが強まったと思います。

今後も今までと同様に語り部KOBÉ1995の方との交流を深め、阪神淡路大震災を風化させないことと共に地震の恐ろしさを次世代に伝承いきたいと思っています。

これからも語り部活動等と一緒に参加させて頂きたいと思っています。



船木ゼミ学生・卒業生 宮本恵実（船木ゼミ4期生）

語り部さんと出会うまで、私にとって阪神淡路大震災は講義や新聞、テレビからの情報しかなく文面的なものでした。私自身、震災当時5歳だったので記憶も薄く、身近な被害も無かったというのも理由の一つです。

しかし、当時の話を聞かせていただいている内に震災の事をもっと知りたい、周りに知ってほしいと思うようになりました。そのきっかけになったのが田村さんの『今の子供は阪神淡路大震災を経験していないし、知らん子ばかりや。知らんままでええんかな…』という言葉です。防災を勉強しているからこそ、伝えられる事、発信出来る知識や技術があるのではないかと。何気ない言葉だったかもしれませんが、けれど、ずっと震災の事に受け身だった私が『じゃあ私が子供たちに。』と自ら動きたいと思うようになりました。教材を作成し小学生に実践していく中で、私の背中を田村さんの言葉がずっと押してくれていました。

私は今震災とは関係ない仕事に就いています。その為、学生の時ほど災害や震災の情報を多く得ることが出来ていません。けれど、震災20年の年に改めて阪神淡路大震災と向き合ってみると、船木先生を始め語り部さんや多くの先生方とこうしてつながれている事に気が付き、この環境に感謝し、大切にしたいという思いでいっぱいになりました。

震災は教えてくれました。今日を生きていられる身体、支えてくれる家族、仲間、環境を当然の事とは思わず、日々感謝すること。ありがたいと思ったら、自分の言葉で『ありがとう』と伝えること。これからのために、今自分が出来る事を一杯すること。震災から学んだこと、震災から繋がった人との出会いを大切に、これからも日々感謝、日々精進していきたいと思っています。



船木ゼミ学生・卒業生 大山真奈見（船木ゼミ5期生）

語り部KOBÉ1995の皆様へ

私が、阪神・淡路大震災を経験したのは、3歳の時でした。幼かったせいか記憶は少なく、とてももどかしい思いをしていました。そんな時、語り部の皆様とお会いしました。

震災での経験、人々の様々な考えや、思いを知り、思いを共有することや伝えることの大切さを学びました。語り部の皆様の姿を見て、私も経験した事や学んだことを自分の言葉で伝えようと強く思うようになりました。

語り部の皆様は、学生だった私達にも、とても優しく接してくださり、人との繋がりへの愛を感じました。語り部の皆様との出会いに、本当に感謝しています。

船木ゼミ学生・卒業生 近藤梨加（船木ゼミ6期生）

語り部KOBÉ1995の語り部さんのお話を聞かせていただいて阪神・淡路大震災は、私が想像する以上に、人々に大きな恐怖と損害を与え、心に大きな傷を残し、大きく人生を狂わせるものであったこと。私が感じたものは、20年経っても決して消えることのない震災の悲惨さと悲しみ、それと共に記憶を受け継ぐことの大切さを気づかせていただきました。

私は阪神・淡路大震災当時(3歳)は香川県に住んでおり震災の記憶は全くありません。語り部さんたちのお話はどの言葉にも重みがあり、心に頭に身体に、一言一言が突き刺さる思いでした。文通相手の方は、震災を思い出すことさえ怖くお話できない方もたくさんおられる中で、自身の震災体験を何年もかけて語り継いでくださる語り部さん達の強さはものすごく印象的です。私たちは生き続けなければならない、そして語り部さんだけではなく震災の経験を語り継ぐことも神戸の方々から学ばせていただいた震災の記憶とともに、災害を乗り越えるために大切な「人と人とのつながり」の大切さを伝えることが、次代を担う私たちの役割であると考えております。そして、これからも神戸の方々を支える活動を続けて行きたいです。



船木ゼミ学生・卒業生 吉田麻美（船木ゼミ5期生）

今年で震災から20年が経ちました。

私は震災当時、神戸市灘区に住んでおり自宅周辺もかなりの損害を受けたと両親から聞きました。当時5歳だった私には、断片的な記憶しか残っていませんでした。まさか大学時代に防災を専攻し、震災に関わる勉強をするなんて思ってもみませんでした。

しかし防災という分野に関わり、神戸学院大学の教授や他大学の方、そして語り部KOBÉ1995の皆さまと関わりを持つことで私の人生は大きく変わりました。

そして大学3回生のときに起こった忘れもしない東北での大震災…

私の人生に大きな影響を与えたあの出来事は社会に出た今でも私の人生の糧となっています。

語り部KOBÉ1995の皆さまとの交流させて頂いた中でも、私の中で特に印象に残っている「野田村っ子たちを神戸に呼ぶ」という企画です。東日本大震災が発生してから現地でのボランティアや募金という方法に関わりを持たせていただいていたのですが、東北の子供たちを神戸に呼び、一緒に楽しい思い出を作るという大きなプロジェクトに参加させて頂きました。そして、語り部さん方が繋いでくださったご縁は、私が大学を卒業し社会に出た今でも切れることなく続いています。

大学3回生の頃、「岩手県の子供たちを神戸に招待する企画があるので、手伝ってくれるかな」と声をかけていただきました。私自身語り部KOBÉ1995の皆さまと一緒に何かさせて頂くのは初めてのことで緊張もありましたが、「自分にできることを頑張ろう」という思いで参加させて頂きました。

どこに行ったら楽しんでくれるだろうか、震災を乗り越えようとしている神戸は子供たちにどう映るのだろうか、津波を経験した子供たちに海を見せて大丈夫だろうか、など細かい部分まで配慮され、何度も何度も協議され、迎えた「野田村っ子企画」当日。行程中、何度も見た語り部さんたちの慈愛に満ちた笑顔。岩手県に帰った後も思い出を見返せるように撮られたUSJのキャラクターたちの写真。鉄人28号に込められた思いを知り、その後の全員での鉄人ポーズ。「野田村の子供たちを笑顔に」という心で作られられたこの企画から学んだことは本当に多かったです。

語り部さんとお話させていただいた中で「子供たちの笑顔は町を元気にする。町が元気になれば市や県が元気になる。そして子供たちが笑顔でいれば大人は頑張れる。そうして復興は進んでいくと思う」という言葉が印象に残っています。社会人になった今、私は子供たちと関わる仕事をしています。防災と直結した仕事ではないですが、大学時代多くの人たちから学んだことを、未来を担う子供たちに託せるように毎日を精一杯生きたいと思います。

語り部KOBÉ1995の皆さまには、本当にさまざまなことを教えていただきました。感謝してもしきれないほどのものです。時間が経つと人々の記憶の中から少しずつ震災の思い出は風化していきますが、なくしてはいけない想いや記憶を多くの人に残し、語り継いでいく人が必要であると思います。そして、私自身も語り部KOBÉ1995の皆さまのように思いを紡いでいける人になっていきたいと思っています。

崔さんの教材作成にあたっての感想 高上大史（船木ゼミ8期生）

私たちは、阪神淡路大震災で家族を失った崔さんという人に出会った。初めて会ったときは、なんとなくという気持ちだったが会うたびに当時の様子や崔さんの自治会に参加する姿などの話を聞いて、こういった話をもっといろいろな人に聞いてもらいたいと思った。

そこで、私たちは崔さんが経験した震災を教材にするという事に至った。在日という差別がある中で、日本という国の中で起こった震災をどう乗り越えてきたかなど崔さんの人生がこの教材で分かってもらえるような教材にしたい。

崔さんの教材作成にあたっての感想 山下大空（船木ゼミ8期生）

崔さんと関わるようになったのは、去年の後期のゼミが始まってから出会ったのが初めてだった。最初の印象としては在日朝鮮人の方ということで、身構えてしまっていたが、崔さんの語り部に参加したり、接していくうちに、今はお父さんのような存在に感じるようになりました。

来年の1月17日で阪神・淡路大震災が起きて20年を向かえようとしています。崔さんと出会ってから、阪神・淡路大震災の、当時の様子であったり、今まで知らなかったことを学ばせてもらったり、そこでのつながり、助け合いという大切なものを学ばせてもらい意識も高まるようになりました。

これからも、そこで知り得たことをしっかりと自分の身に付け、崔さんと未永く付き合っていきたいと思います。



崔さんの教材作成にあたっての感想 澤侑汰（船木ゼミ8期生）

今回、崔さんから最初にお話を聞かせていただいたときにすごく心に響きました。震災がどういうものだったのかなど息子さんを亡くなられたことなど自分たちがまったく知らないことを教えてくれてとても勉強になりました。

人として何に対してもつながりの大切さというものがどれだけ大切なのかを改めて考えさせられる機会になり日頃の挨拶などを前よりかはするようになりました。その少しのきっかけが震災が起こったときに大きな力になることがわかりました。

教材を作るために崔さんのことをもっと詳しくわかるために話を何回も聞いたり写真などを見せていただいて当時の大変さも感じる事ができたり、その中でもつながりがあったことによって色々なことで笑顔が増えていったりなど特別なことを感じました。

崔さんに出会えたことが人生での大きなことだと思いました。ありがとうございます。

崔さんの教材作成にあたっての感想 藤川凌（船木ゼミ8期生）

DVD教材作成にあたって、1番思ったのはいろいろな人に出会い、いろいろな経験が出来たことです。周りのゼミとは違い、普段のゼミでは出来ないこと、経験できないことをさせてもらったと感謝の気持ちでいっぱいです。震災経験者であったり、テレビ関係者など接することのない方々の話を聞けることは今後の人生においてとても重要なことだと感じました。

崔さんの教材作成にあたっての感想 和田崇弘（船木ゼミ8期生）

崔さんの話を何度も聞いてきて思ったことは人と人のつながりは大切だということ。正直、崔さんの話を聞くまでそこまで深くつながりについて考えたことはなかったけど、人と人のつながりはあいさつから始まるというのを聞いて、確かにそうだなと感じました。震災当時、多くの方が被害に遭って苦しんでいる状況の中でも、お互いに助け合い、支え合うことで震災を乗り越えることができ、地域の復興を進めていく上でも最初は人が全く集まらなかったが地道に努力することで今では地域の方が様々なイベントや活動に参加するようになった。崔さんは、自分がやらなければ何も始まらないし、変えていくためには行動に移すことが必要で、今後も今の活動を継続していくことが重要だとおっしゃっていたことが印象に残っています。

崔さんの教材作成にあたっての感想 藤田悠真（船木ゼミ8期生）

崔さんの被災経験について聞いてみて、これまでたくさん被災した人に話を聞いてきたので今回もまた同じような話かと思いました。しかしその中で一つ感じ取ったことがあります。それはつながりです。これまで日本人との接触を避けてきた人があることをきっかけに接触を試みるようになったということに関心を持ちました。人とのつながりを1度拒絶するということはその後接触を試みることは非常に難しいものだと思います。

しかし崔さんは震災をきっかけにわかりました。そこに大きな要因があったのではないかと感じました。また、つながりというものは非常に偶然的な物だと思います。例えば田村さんの例のようにたまたまテレビで気付いたというケースは非常に稀であり、私たちの崔さんとの出会いも船木ゼミに入らなければなかったかもしれません。その出会いというのは大切にしないといけないと思いました。

今年で震災20年になります。その中で息子の思いを継いで語り継ぐことを続けて欲しいと思いました。

崔さんの教材作成にあたっての感想 高橋尚之（船木ゼミ8期生）

震災当時の話を聞いた時、胸が苦しかった。と、同時に崔さんは強い人だと感じた。息子さんを亡くした後、避難所生活を経て自治会結成、復興に努めていて、自分は絶対こんなこと出来ないと思った。自治会の活動に参加したことないのでまだどんなものかわからないが、実際参加してみたいという意欲が湧いた。震災当時暗かった街を明るくしていったのは崔さんの努力であり、それだけの力を持っていることが分かった。

崔さんの教材作成にあたっての感想 内野優作（船木ゼミ8期生）

崔さんと関わってみて、いままでは表面上の阪神淡路大震災しか知りませんでした。少しずつ内面を知りつつあります。

いつもは笑顔で話をしてくださる崔さんも、震災のこととなると真剣に僕らと向き合ってください僕たちにとっても貴重な体験をさせていただきます。話の合間に見せる崔さんの険しい表情や悲しい表情により震災のおそろしさを肌感じます。

普段は見せない表情をみて僕は人としての強さを感じ、また自治会活動の話聞くことで人のために行動できることに懐の深さを感じました。

崔さんの教材作成にあたっての感想 中畑公太郎（船木ゼミ8期生）

崔さんと交流を持つ中で強く感じたのは震災を忘れずに後世に伝えていかなければならないということです。

崔さんは震災で息子を亡くされました。その当時のお話を聴くたびに災害の非情さを感じます。もしあの時引き留めていなければ、そう考えるだけでも胸が痛みます。

そんな悲しい経験をされたにも関わらず、メディアからの取材を断らないという崔さんの言葉が印象的でした。

震災から来年で20年になります。今ですら震災を学ぶ機会が減っています。私自身も大学で防災を専攻するまで、震災についてしっかり学ぶ機会はほとんどありませんでした。この状態が続けばいずれ震災が風化してしまうのではないかと危機感を覚えています。

これから50年100年先の後世にも、震災を生き抜いた人々の想いを伝えていかなければなりません。崔さんとの交流で強く思うようになりました。崔さんが経験された悲しい出来事が繰り返されないように、今私ができる事を精一杯取り組みたいです。



崔さんの教材作成にあたっての感想 中川喬登（船木ゼミ8期生）

私たちは大学2回生の後期に崔さんと出会いました。崔さんに阪神淡路大震災、それ以前の話を聞いたのが初めてお会いした時です。ここから私たちの教材作りが始まりました。

崔さんの明るく、接しやすい性格にたくさんの疑問を抱きました。

なぜ、悲しい過去があるのにこんなに前向きに生活を送っているのか？

なぜ、悲しい過去を私たちに全て伝えてくれるのか？

崔さんの人生の分岐点となるエピソードをいくつも聞きました。この話の中で学生である私たちが率直に思った気持ち、崔さんが伝えたいものを感じ取り教材としていきました。生の声を私たちがうまく噛み砕き教材へと落とし込むことがとても難しい作業でした。

私たちがこの教材を作る中で、学生がこれを伝えたいという、個人個人の感じとったギャップ、それをうまく埋めるためにより良い伝え方はないか？という所が難しかった部分であり、これからの生活の中で体験しておいて良かった部分となりました。

私たちが崔さんの教材作りの中で得たものはこれからの生活にメリットとして吸収していったのではないかと思います。崔さんが私たちにもたらしてくれた影響は計り知れません。本当に感謝しています。ありがとうございました。

崔さんの教材作成にあたっての感想 大橋秀史（船木ゼミ8期生）

崔さんとの最初の出会いは、去年の秋のことだった。ゼミ中に崔さんが訪問し、そこから崔さんの映像を作成するという、我々の教材作りが始まることとなった。

教材を作成する以前に、崔さんがどんな人物なのか、知らないことがたくさんあった。したがって、崔さんがどんな人物なのかを知るために、教材作りを通して崔さんと関わる機会を非常に多く持つこととなった。崔さんの活動を間近で見ることで、崔さんは語り部として、在日朝鮮人として、素晴らしい人間であると感じるようになった。最初はいくつかの隔たりがあったかもしれないが、今では崔さんを身内のような、とても身近な存在のように感じる。そして、これらを通して崔さんの活動を、多くの人に知ってもらいたいと強く思うようになった。そのためには我々が現在作成している映像を、可能な限り出来の良い物へと仕上げなければならない。崔さんが実際に話された過去の話、そこから感じ取った「つながり」というキーワードをどう伝えていくかがポイントになると思う。

来年は震災20周年という大きな年を迎えることになるので、それに見合うような立派な教材作りに、今後も精一杯取り組みたい。そして、今回の教材作りを通して関わった人々と、未永く付き合っていくことができればよいと思う。



崔さんの教材作成にあたっての感想 藤原 一徹（船木ゼミ8期生）

私たちは、阪神淡路大震災で家族を失った崔さんという人に出会いました。初めてお会いしたときは、お互いに緊張した感じだったが、回を重ねるごとに、現在の崔さんの活動内容であったり、震災当時の様子などの話を聞き、自分も崔さんに話していただいた貴重な当時の出来事や思いなどを多くの人々に伝えていきたいと思うようになりました。

崔さんに話していただいた当時のお話から、自分が一番感じたことは、「人との繋がりの大切さ」です。

人との繋がりは、普段の生活から、作っていけるということ、その繋がりが、いざという時に大変重要になるということは、崔さんのお話を聞いて、強く感じました。

そして現在、私たちは、崔さんの経験を元にした防災に関する教材を作成しています。

そして、崔さんは現在、自治会で積極的に活動されていることも、取材を通して知ることができました。崔さんの行動力、積極性、責任感、コミュニケーション力の素晴らしさはお話をさせていただく度に感じています。

そして、教材を作成する過程において、崔さんを始め、多くの方々と出会い、お話をさせていただくことによって、自分にとって非常に貴重な経験をさせていただいているなと感じています。

震災当時の出来事や教訓を伝えていけるような、教材を作り上げたいです。



活動の写真



2005年1月20日松原市立中央小学校



2006年10月15日吹田市地区防災委員会

活動の写真



2006年10月10日 神戸学院大学



2006年11月21日 神戸学院大学

活動の写真



2008年1月30日 震災の話を聞く会



2010年1月16日 豊富小学校



2010年8月29日 佐用町

活動の写真



2011年8月3日-6日 岩手県野田小学校の神戸訪問

活動の写真



2011年12月15日 岩手県野田小学校

活動の年表

2005年1月23日	大阪府松原市中央小学校	2011年1月14日	舞子高校
2005年2月25日	滋賀県湖西地域振興局	2011年1月18日	松原中央小学校
2005年4月15日	大阪府泉南市介護の会	2011年1月23日	津市防災大学
2005年6月23日	滋賀県秦荘町公民館	2011年3月26日	津市ボランティア協会
2005年10月15日	大阪府守口市三郷公民館	2011年12月15日	岩手県野田小学校（6年生）
2005年11月26日	滋賀県湖南地域振興局	2012年1月16日	長田南小学校
2006年1月19日	大阪府松原市中央小学校	2012年1月17日	若宮小学校
2006年6月29日	大阪府箕面市中央生涯学習センター	2012年1月17日	西灘小学校
2006年7月6日	同上	2012年1月17日	意岐部東小学校
2006年10月5日	神戸学院大学防災・社会貢献ユニット	2012年1月22日	津市防災大学
2006年10月15日	大阪府吹田市五月が丘防災委員会	2012年1月24日	松原中央小学校
2006年11月21日	神戸学院大学防災・社会貢献ユニット	2012年2月14日	加古川市志方小学校
2006年12月12日	同上	2012年6月2日	久御山町自治会
2007年1月15日	大阪府松原市中央小学校	2012年9月13日	守口市東部公民館
2007年1月18日	兵庫県姫路市旭陽小学校	2013年1月12日	湊川多間小学校
2007年1月19日	大阪府高槻市阿武野中学校	2013年1月15日	松原市中央小学校
2007年2月26日	神奈川県横浜市民生児童委員会	2013年6月10日	恵我小学校
2007年3月9日	兵庫県稲美町民生児童委員会	2013年8月29日	秦荘中学校
2007年3月28日	門真市公民館（社協）	2013年12月9日	西灘小学校
2007年4月30日	吹田市民児協（社協）	2013年12月16日	白川小学校
2007年6月12日	箕面市西南小学校地域防災（社協）	2014年1月15日	松原中央小学校
2007年7月14日	サンテレビ	2014年1月17日	谷上小学校
2007年9月9日	サンテレビ	2014年1月17日	意岐部東小学校
2007年9月16日	箕面市地域防災（社協）	2014年1月18日	湊川多間小学校
2007年10月24日	神戸学院大学		
2007年11月18日	箕面市萱野北地域防災（社協）		
2007年12月5日	神戸学院大学		
2008年1月16日	松原市中央小学校		
2008年1月18日	姫路市旭陽小学校		
2008年3月2日	摂津市安威川公民館		
2008年5月25日	箕面市地域防災		
2008年6月11日	神戸学院大学		
2008年9月23日	箕面市地域防災（社協）		
2008年10月26日	箕面市地域防災（自治会長会）		
2009年1月17日	姫路市立豊富小学校		
2009年1月22日	姫路市立旭陽小学校		
2009年2月15日	箕面市萱野地区防災		
2009年6月30日	箕面市総務課		
2009年8月24日	箕面社協箕面小地域防災		
2009年9月26日	高槻市コミュニティ研修会		
2010年1月14日	松原中央小学校		
2010年1月15日	姫路市旭陽小学校		
2010年1月16日	姫路市豊富小学校		
2010年6月13日	茨木市自主防災会		



「語り部 KOBE1995」

—阪神・淡路大震災からおおよそ20年、

今ここに生きていることを感謝し、さまざまな震災体験を語り伝えます。

阪神・淡路大震災から早くもおよそ20年が経ちました。わたしたちは、あの時のことを語り続けています。それは、その時のことをいつまでも忘れてはならないという思いからです。私たちの活動では、

(1) 生の体験を語ります：私たちの活動では、メンバーが直接体験したことを話します。

(2) 命の大切さへの眼差し：何人かのメンバーは家族や身近な人を震災で亡くしています。命の大切さについてここをこめて話します。

(3) 体験の中から生まれる知恵：これからも日本は、地震、台風など大きな災害に見舞われるでしょう。災害が起こったとき役立つ知識・知恵を被災者の立場からお伝えします。

(4) 被災地への支援・応援：東日本大震災、中越地震、四川大地震、兵庫県佐用町水害など、近年の災害被災地に向かい、自分たちの被災経験を踏まえた支援活動も行っています。

詳しい情報はwebサイトをご覧ください。<http://www.drs.dpri.kyoto-u.ac.jp/staff/yamori/kataribe/kataribekobe1995.html>

■「こんなメンバーで進めています」



田村勝太郎 (代表) 当時、神戸の小学校教師

- ・自宅全壊、建物の下に埋もれた母を救出。
- ・家の倒壊と小学校での避難生活
- ・小学校の子供達のボランティア活動
- ・この16年 本気の防災、減災活動を求めて



崔敏夫 住居・工場全壊、在日二世、自営業

- ・次男秀光(大学2年生)圧死
- ・成人式のために東京から帰ってきていた大学2年生の息子を亡くす。その無念さ、命の大切さ、地震の怖さを…。
- ・避難所では途方に暮れる在日同胞達の生活を指導をしながら自力再建をめざすが、そのむずかしさを痛感した。ゼロからの出発ではなくマイナスからの出発では…。
- ・明るく安心して住める、災害に強いまちづくりをめざして自治会を再結成し、住民達の絆を深めるために頑張っている



庄野ゆき子 住居全壊、重症で3ヶ月入院

- ・家具のない部屋で29歳の息子は太い梁が落ち即死。
- ・私は家の下敷きで14時間かけてやっと救出される体験を通して、地震の怖さ、命の大切さ、そしてくいのない日を送ることを伝えます。



星野錦江 住居、店共に全壊

- ・倒壊寸前の家から脱出した状況、何の機材もない中、埋まっている人を協力して救出したこと
- ・自営業(居酒屋)の再建を断念するに至った過程
- ・住み慣れた地から離れて、復興住宅移転後のボロボロになった心身を受け止めて来た日々



浅井鈴子 住居全壊

- ・当時小学校5年生の長女亜希子を亡くした。
- ・地震で埋まっていたときの様子
(光のない世界での感覚)
- ・激震地と周辺地域の温度差、避難所での生活
- ・PTSDと診断されてからの心の流れ



船木伸江 (顧問：神戸学院大学准教授)

- ・神戸学院大学生と防災教育の教材開発を実施
- ・学生が作成した防災教育教材について



長谷川元気 当時、小学2年生

- ・自宅全壊、母親と3人兄弟の弟を亡くした。
- ・父親と弟と3人で一緒に生きていく様子
- ・震災後に、震災前の日常が何度も夢に出てくる
- ・現在は、まわりの人のかけがえのなさを、夢を持つ事の大切さを、一人の教員の使命として小学生に伝えている。



矢守克也 (顧問：京都大学防災研究所教授)

- ・防災、災害対応の基本について
- ・ゲーミングやワークショップを用いた防災教育について
- ・語り継ぎの意義

■問い合わせ先：「語り部 KOBE1995 事務局」(代表：田村勝太郎) 〒653-0877 神戸市長田区鹿松町 2-3-15
電話&FAX：078-771-1815 問い合わせは、可能な限り、FAXでお願いします。

※被災地阪神、淡路地域での活動はもとより、「出前語り部」も行っています。学校教育での総合学習、地域での自主防災活動などの機会に、被災者の体験をお聞きになりませんか。

語り部KOBE1995のあゆみ
～現在・過去・未来～

発行日 2014年12月20日
編集 杉山高志
(京都大学矢守研・修士2回)

表紙の写真 阪神淡路大震災の避難所で
間仕切りに描いた小学生の絵
(提供：田村勝太郎)

10-20 語り部
K O B E
1 9 9 5